

イメージマップ作りを通じた市民育成に関する調査（1）

— 小学校国語科教師を対象に —

Research on Citizen Development through Image Map Creation:
Targeted at Elementary School Japanese Language Teachers

藤森 啓太¹ 後藤 賢次郎²
FUJIMORI Keita GOTO Kenjiro

要約：本研究は、小学校国語科教師が市民育成をどう捉え、どう実践につなげているかを調査・分析することを通して、市民育成における国語科教育の可能性と課題や、教科による市民育成観の違いとその理由を社会科との比較の中で明らかにし、社会科教師の市民育成観を再考するものである。調査回答からは、国語科教育の可能性として、市民として望ましい態度形成へ良い影響をもたらす要素があること、国語科がその特性上、市民育成と強い関係があることが示唆された。一方、国語科の学びが他教科や社会の創造に向けてどう生かされていくかについてはあまり意識されていないことも明らかになった。そこから、社会科教師の市民育成観として、論争問題等、社会の形成者として対峙していくべき事象を学習対象として選択することや、今在る社会をよりよく生きる市民の育成を意識するのではなく、社会自体を問い直すことができる市民の育成を意識する必要性が示された。

キーワード：市民育成 社会科教師 国語科教師 カリキュラム 社会問題

I 問題の所在

1 学校教育における市民育成へ向けたアプローチの現状

これまでも各教科等の視点から、市民育成それ自体の重要性や、育成に向けた理論や実践が報告されている（長沼：2010，横田：2018など）。しかし、それらは市民育成の中心を担う社会科との関連性や、各教科等の視点を踏まえた学校教育全体としての市民育成の在り方への言及が十分ではない。また、藤森（2021）は、「自身の経験から、各学校の教育課程は市民育成を強く意識して整えられていないことが多い。そのため、例え社会科において市民育成のためのカリキュラムが構築できたとしても、市民としての変容には限界がある」と公立学校のカリキュラムの現状について言及している。これらのことから、学級担任が複数の教科等を網羅的に受け持つ公立小学校の現状においては、職場環境や個々の教師観等から考えて、教師個人や学校教育全体としての「市民育成」を強く意識した実践を展開することは困難であると言える。

2 教育の目的

教育基本法第1条には「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」と示されている。この目標の実現は、学校教育全体を通して意識されなければならないことであるが、先に

¹ 北杜市立長坂小学校 ² 山梨大学

挙げた課題のような障壁も存在している。また、広田（2015）は、シティズンシップ教育（市民育成）の充実を妨げている要因の一部として、①市民育成のためのカリキュラムが、カリキュラム全体の中で周辺化してしまっていること、②（社会科における暗記など）学校を地位達成の手段と見なす道具主義的教育観があること、③教師の力量（理解）不足を挙げている。これらの現状からは、実践者の視点に立ち、市民育成の現状を各教科等から捉え直し、社会科を中心とした現実的かつ効果的な市民育成に向けたカリキュラム作成や実践を展開していったり、社会科が目指すべき方向を改めて考えたりする必要性が浮かび上がってくる。

3 研究の目的

そこで、本稿では、小学校国語科教師が市民育成をどのように捉え、それがどのように実践につながっているのか（市民育成観）を調査する。さらに、調査結果を分析し、市民育成における国語科教育の可能性と課題や教科による市民育成観の違いとその理由を社会科との比較の中で明らかにし、社会科教師の市民育成観を再考して示す。

II 研究方法

1 イメージマップ作り

今回はイメージマップの作成を取り入れた半構造化インタビューを行った。イメージマップを用いた理由としては、①市民育成に関して、社会科教師に比べ問題意識や関心を持っていないと想定される国語科教師へのインタビューにおいては、市民育成観を直接問うのではなく、「市民育成」から連想・派生する言葉を書き出させることで、調査対象者の考えを捉えることができる ②市民育成観を書き出しておくことによって、深掘りしたい内容等が出てきた際に、調査者、調査対象者が共通のイメージマップを、可視化した状態でインタビューすることができる ③調査対象者が自身の市民育成観を客観的に捉えることができることが挙げられる。

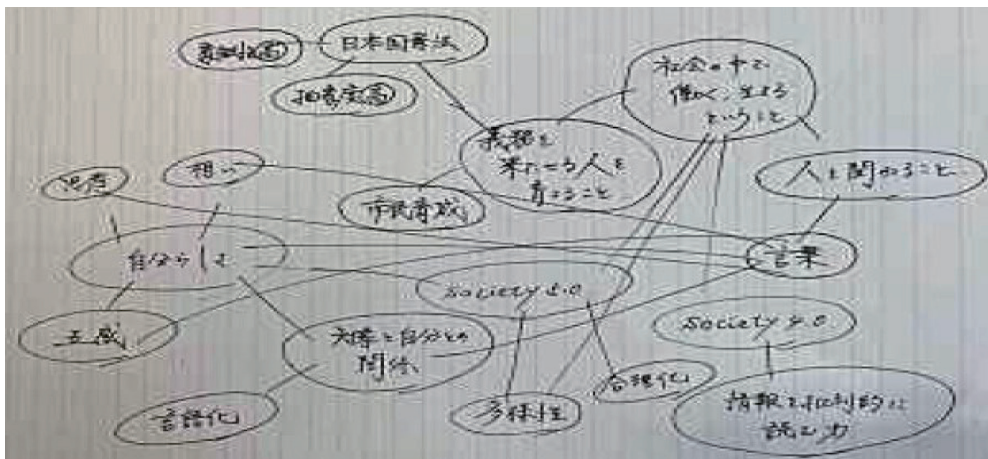


図1 イメージマップの例

2 インタビュー

インタビューは、以下を基本的な流れとして行った。

- ① 市民育成のイメージマップを書き出してもらおう。
- ② イメージマップに表出された言葉の中で、国語科教師として特に大切にしていることと、その理由を問う。
- ③ 大切にしていることが、どのように実践に活かされているか問う。

この他、イメージマップに表出された言葉や調査対象者とのやり取りから、適宜質問を追加しながら尋ねた。

調査対象者は国立大学附属小学校の国語科教師3名（表1A～C）と国語科教育に携わる国立大学教員2名（表1D・E）とした。調査対象者選定の主な理由は、前者の場合、勤務環境や所属校の特色等の点から、公立校教師に比べ、様々な視点で国語科教育を捉え実践している可能性が高く、ある種特殊な環境下にある教師が市民育成をどう捉えているか明らかにできること、そこから、異なる環境にある公立校において何ができるか、公立校だからできることはないのか等、現実的な理論の構築や実践に結びつけることができる考えたためである。後者の場合、教師教育者としての考えや、理論と実践のギャップを明らかにすることで、大学教育で学んだ知識等を活かした実践を行っていく困難さや、実践者にはない視点について言及できると考えたためである。なお、発表タイトルには、調査対象者を「小学校国語科教師」としてあるが、研究を進めていく上で、大学教員にも調査をすることで、より多角的な分析が可能となると判断したため、対象者に加えることとした。

表1 調査対象者

	調査日	年齢（当時）	性別	教職年数
A	9/2/2022	33	男性	9
B	9/6/2022	36	男性	9
C	9/20/2022	36	男性	10
D	9/15/2022			
E	9/15/2022	48	男性	5

Ⅲ 調査結果

1 国語科教師の市民育成観の共通性

（1）言葉について

国語科を中心に研究している3名であったが、市民育成観についてはそれぞれの個性が表れていた。一方、イメージマップに表出されたものの中で特に大切にしていることを問うた後に語られた思いからは、根底に共通していると捉えられる考え方も存在していた。

共通性の一つ目は、多少各々の捉え方は異なるものの、3名全てに見られたものが市民育成に向けた「言葉」への言及であった。A氏は、

A-1 市民育成っていうのを考えるのに、やっぱり自分の好きな分野というか、そこにつなげ

で考えていった時に、結局世界全てが言葉でできているというか、人と繋がるのも、モノとつながるのも全て言葉で理解して、言葉でやりとりしてることがあるからそこは大きいよなって思って -中略- だから国語科って（市民育成に対して）すごく重要な役割を担ってるなって、改めて感じたところです。

と述べ、人々の関わりの中で社会が構築されていくことやそのための言葉が重要であることを再認識している。B氏も同様に、

B-1（市民育成を考えた時、特に大切にしていることは何かと問うた後）言葉です。-中略- 言葉をメインフィールドにしているっていうこともあるんですけど、自分の人生に置き換えても言葉の重要性をすごく感じてきた。-中略- 人と関わる以上は言葉を介してコミュニケーションを取らなくてはいけないので、そこで相手と意思疎通を図れたり、共通理解とか合意形成を図れない限り人とは生きていけないし。

と述べている。C氏は言葉の特性に着目しながら、

C-1 社会をより良い方向にしたいとか、今社会に何が起きていて、自分には何ができるのかとか、全て情報を得るためには、言葉を通して情報を得るわけだから、言葉の持つ特性みたいなものを、国語科の中できちんと教えておいてあげるということは、市民育成にとって有益だなんて思ったんだよね。

と述べている。ここから、国語科教師という立場や教科の特性を踏まえた捉え方をしていること、言葉を使用・理解することを通して、人間の行為が生じたり、人やモノとつながったりすることができ、それが市民育成につながっていくと捉えている点を共通性として見出すことができる。

（2）多様な解釈や見方について

二つ目の共通性は、「多様な見方や解釈」への言及である。B氏は、

B-2 言葉っていうものは、一言では言い切れない多面性、奥深いものがあると思うので。多様であるはずのものが、Bっていう一個人の元、多様であるべき柔軟なものが、何かBっていうフィルターで固まってしまうことが、怖い。言葉っていうものは本来、変わっていくもの、時代によって、人によって、だから、重要性を教えることはできたとしても、その価値であったり良さであったり、子どもなりに、臆けながらも実感しつつ、学んでもらいたいなっていうのがある。

と述べ、C氏は、具体的な授業場面を挙げながら、

C-2 例えば詩の授業で、同じ題材でも紡ぎ出す言葉はみんな違うよね。それを単純にみんな鑑賞しあって面白がるっていうのも、多様性を認め合う授業になるなって思うし、作文の授業でも題材を限定しがちなんだけど、報告する文章を書こうっていう単位だったら、フォーマットに沿って書いていけば題材は多様であっていいと思うんだよね。だから3年生だと街探検で見つけた道路標識や特徴を報告しようみたいな感じでやるんだけど、もっと題材を自由にしてあげて、

好きなものについて調べて報告しようってすると、子どもたちイキイキするし、いろんな興味関心を元に、自分なりの文章を書くことができるんだよね。だから多様性とか、自分らしさが国語科の教科内容と関わって、育まれる瞬間は書くことの授業多いのかもしれないなって今、思ったきたかな。

と述べている。両氏は、国語科の授業を通して、多様な見方や解釈の存在に気づかせ、それ自体の価値や、自分らしく考えることの意味を捉えさせようとしている。また、そのことを阻害しないような教師の関わり方にも留意していることが伺える。

（3）説明する力・表現力について

3つ目の共通性は「説明する力・表現力」への言及である。A氏は、自己表現、コミュニケーションとしての説明する力として、

A-2 説明する力をつけるって言うのが、一番大切にしているところです。－中略－やっぱり生きていく上で、自分の思っていることをしっかり相手に伝えられるとか、相手が言っていることをちゃんと理解してあげることができるとか、そういった読み取る力、話す聞く書く、伝える力、そういったところは、生きていく上で外すことはできないって思っていて、だからそこを中心にベースに考えていくことによって、子どもたちが、自分っていうものを表現したり、自分がやりたいことを自己実現していくためには絶対的に必要なんじゃないかと思っているので、ここを大切にしています。

と述べ、B氏は、今の社会を捉えた上で、

B-3 今まで（のように）集団で埋没していて良かった社会じゃなくなるかなって思って、あのいい意味でも悪い意味でも、人との違いが求められてしまう、人と違うことが前提となっている社会なので、そうなった場合に自分がどんな存在かっていうのをある程度表現できなきゃいけない。－中略－いろいろな対象に対して自分はどう思うかっていうのをちゃんと言語化できないと、伝えられないと、相手には伝わんない。－中略－自分がどういう存在かって言うのをアウトプットしていく文脈で、考えなきゃいけない。

と述べている。両氏は、個として社会の中でよりよく生きていくための重要な要素として説明する力や表現力を挙げていることがわかる。

2 市民育成観の差異

（1）社会とのつながりについて

これまで述べてきた共通性の一方、3名の市民育成観には差異も見られた。

一つ目は、「社会とのつながり」をどう考えているかという点である。学習内容やそのための教材についての話の中でA氏は、

A-3 僕は言語活動がすごく大事だなって思ってて、どういう単元構成にするかっていうところを、子ども達の実態にあったとか、子どもたちが意欲的に取り組めるとか、問題意識を持って

るとか、そういったものの中から、言語活動っていうものを設定する。－中略－（国語科の教師として教材研究とか、単元を作る時に、社会に目を向けるとか、社会や学校の現状を踏まえてやるとか、そういった意識はあるのかという問いに対して）僕は割とそういう意識があると思いません。

と述べ、B氏は、自身の授業観に関わる発言の中で、

B-4 言葉は結局他教科等につながっていますし、日常生活全般に影響しているので、国語で学んだことが生きるっていうのももちろん大事なんですけど、なんか日常の一部を学んでいるみたいな、普段子どもたちの身の回りにある言語生活の一部を切り取って授業しているみたいな、だからその日常生活に、言語生活にあるものを、問題にして、そこに対して悩むこと、考えることが結局は自分の言語生活を豊にしている。

と述べている。一方、C氏は教材研究に関わる話の中で、

C-3（国語科の教師として教材研究とか、単元を作る時に、社会に目を向けるとか、社会や学校の現状を踏まえてやるとか、そういった意識はあるのかという問いに対して）いや、してないかな。あんまり俺はそういうのやったことないかな。

と回答していることから、A氏やB氏は、日常生活や子どもたちの経験そのものを教材として選定したり、意識的に授業をしたりしている一方、C氏は、教科書の内容を中心に授業をすることを基本としていることがわかる。

（2）言葉の特性の捉え方について

二つ目の差異は「言葉の特性の捉え方」についてである。3名とも言葉を大切にしていることは既に記した通りだが、C氏は言葉の持つ危険性について以下のように述べている。

C-4 言語化されたある出来事が、ある人にとってはそれは事実のような描写かもしれないけど、他の人から少しそれは、捉えた人の主観的な解釈が入り込んでいるって思えるものかもしれないし、社会的な出来事を捉える時にも、やはりそれを表現した人のフィルターがかかっているということをよく理解しておく必要があると思うの。国語科で実はそういうことやってるなって思って－中略－今の学習指導要領でいうと、情報の取り扱いに関する事項っていうところで示されたと思うんだよね。情報っていうのは、発信者のフィルターがかかっているとか、受け取る側の解釈によって感じ方が変わってくるっていう、これは新聞でも同じで、同じ内容でも表現のされ方が違っていると、どの部分に着目するかが変わってくるとか、そういうことを知識として子どもたちに伝えるっていう、そういう指導内容が国語科にはあると思うんだよね。

A氏やB氏も言葉の多面性についての言及はあるわけだが、C氏は特に言葉の持つ危険性を認識し、その点もしっかりと国語科で学んでいく必要性を述べている。

3. 国語科に携わる大学教員の市民育成観

（1）教科書や特性から見た国語科の役割

現場の教師へのインタビューでは「何ができるか」を中心に話をしてもらい、その結果を分析した。大学教員には「何ができていないか」といった課題や展望も含め、現場教師との比較をしながら分析をしていく。

まず、教科間のつながりから捉えた国語科の特性について、E氏は次のように述べている。

E-1 社会科との内容的な関連を図りたいという点では、市民育成の一旦を、目的ではないんですが、教材として、手段としては使わせてもらっているなど、教科書研究からも言えることなんだろうなと思いました。—中略— 本当に内容面、国語の教科書は社会に内容を借りているので、そういう点では、今後の社会の動きによっても国語の教材は確実に変わるし。という点では、国語から手を伸ばして、社会科かしくくださいっていう内容関連を、さっきのコミュニティデザインだったり、伝統文化であったり、そういうところでは、社会の動向を見つつ、国語科が歩んでいるという視点もあれば、人間が作りだした営みだっていうところでもできていくし、今後の社会、本当の市民っていうのはどういう市民がいいんだろうって、いうところからも、国語は今後社会に目配せをしていかなければいけない。

E氏は、他教科とのつながりにおける国語科の特性を「(内容に関しては)社会科や理科の間借りをするのが国語」とも述べ、教科書に掲載されている内容も、社会の動きによって変わっていくものと捉えるなど、教科書の内容構成そのものが市民育成と強いつながりをもつと考えていることがわかる。

（2）市民育成の視点から捉えた国語科教育の課題と展望

次に、課題と展望についてである。D氏は、

D-1 正解はないと言って、複数性を擁護するのはいいんだけど、子どもたちの一人一人の考えを汲み取っていったり、吟味したり、どういうことが大事なんだとか、追究のベクトルが失われている授業があると、それが一つ問題としてあると思う。2つ目に、教材研究が大事になるが、この文化がだいぶ弱くなっていると思います。—中略— 学習指導案の形式が、学習指導要領の指導事項の文末調整で、目標と評価を、学習指導要領の文言で埋めるようになっている。そうすると国語科の場合、別の教材を取り上げても同じようになってしまう問題が出てくるんです。教材の、人間の唯一性の前に、教材の個別性が消えちゃって、その教材ならではの考えられるっていう教材価値がないところで言語活動がなされてしまうような授業が出てきていて、そういうことをやっている限り(市民育成に)つながっていかないだろうと。

と述べ、さらに、言葉をどう認識するのかという点について、

D-2 認識を支えるものとしての言語、言葉です。例えば先ほどの、「『である』ことと『する』こと」で、民主主義っていうのは与えられるものではなく作り出していけないと無効化するんだとという言説、言葉の集まりですよ。そこと触れ合うことによってそれは生徒の認識の一部になる可能性があるということです。その認識を持って世界を捉えるということになりますから、その認識としての言語が、民主主義っていう問題だとか、唯一性を持った個人として、生き

ていくっていうことで大事になることがあると思います。－中略－ 社会科の教科書は一つの言葉でできているわけですよ。言葉を通じて、歴史を理解していくということになるわけですけど、国語科のアプローチで言うと言葉が変わると、歴史が変わってしまうわけですよ。ですので、そういう歴史と言葉の関係とか、対象と言葉の関係っていうところ、認識の言語ですね。そういう力をつけていかないと、与えられた語りで全てを判断してしまうってような生徒になってしまうと、先生がおっしゃったような批判的な思考力は当然望めないし、なので、まずはその言語について、言葉とはどういうものか、語るとはどういうものかっていう、深い認識が国語科で育つってというのが、他の教科の学びにも関係していくと思っています。

と述べている。E氏は、

E-2（市民像から各教科を捉えたり、つながりを考えたりすることは）大事だと思う。大きなことなんだけど、そういう意識を片隅に持っているかどうかで、なんだかんだに溢れてくる言葉が違ってくるので。年間そういう言葉を浴びている子どもたちは確実にその言葉を受け止めてくれているので、そのつながりがある先生がぽつと出る一言にすごく価値があるんだろうなって、すごく最近感じるんですよ。だからお互いがリスペクトして、お互いのウィークポイントを補い、肩を組んでいくことが、子どもたちをなんていうか多面的な人間に、成長させてあげられるって本当に思うので、国語は内容面から、資質能力面から、さまざまな面から社会科と面や見えにくいものは多々あるんだけど、（まずは）我々の存在が結びつきを知っていくってというのが重要なんじゃないですかね。

と述べている。「追究のベクトルの消失・教材研究不足による教材の個別性の消失」が問題として挙げられているように、D氏のこの発言からは「みんな違ってみんないい」で終結し、追究し続けようとしない、人それぞれの考え方だから干渉する必要はないといった個人主義的発想が、市民育成の視点からみた国語科教育の課題として捉えることができる。また、「言葉を通じて、歴史を理解していく」「言葉が変わると、歴史が変わってしまう」ことから、言葉は認識を支えるものとしての言語であるということ、より考えていく必要があることも国語科教育の課題として捉えることができる。

E氏は、現場の教師の意識として、理想の市民像から各教科を捉えたり、各教科のつながりを考えたりすることや、社会科に限らずに全ての実践者が市民育成に向けた教科間の関連を意識的に図ることの重要性を指摘している。

IV 分析と考察

以上の調査結果から、国語科教師の市民育成観を「子どもの学び」の視点から類型化し、分析していく。

1 3つの類型とそれぞれの特徴

（1）類型

類型化にあたっては、まず、3名の調査対象者それぞれの回答を網羅的に分析しながら、考えの特性や個性がより表れている回答を抽出する。その後、それぞれの特徴を端的に表すことのできる型名をつけることとした。

調査対象者の回答からは、例えばA氏の「説明する力をつけるって言うのが、一番大切にしてい

るところです。－中略－ だからそこを中心にベースに考えていくことによって、子どもたちが、自分っていうものを表現したり、自分がやりたいことを自己実現していくためには絶対的に必要なんじゃないかと思っている」という発言から、よりよく生きていくために必要な力としての説明力、つまり言語能力を重視している点が窺える。これをア) **言語能力重視**と呼ぶこととする。

次に、例えばB氏の「言葉っていうのは、一言では言い切れない多面性、奥深いものである」「そこに（言葉に）寄り添える人を、そこに対して思いを馳せられる人を育てていきたい」という発言から、言語そのものの価値や市民にとっての言語価値を重視している点が窺える。これをイ) **言語価値重視**と呼ぶこととする。

最後に、例えばC氏の「社会をより良い方向にしたいとか、今社会に何が起きていて、自分には何ができるのかとか、全て情報を得るためには、言葉を通して情報を得るわけだから、言葉の持つ特性みたいなものを、国語科の中できちんと教えておいてあげるといことは、市民育成にとって有益だなって思ったんだよね」という発言から、言語そのものの特性を重視している点が窺える。これをウ) **言語特性重視**と呼ぶこととする。これら藤森が帰納的に分けた類型（図2）から、それぞれの国語科教師の市民育成観は、3つの類型をどのように併せ持っているのか、どれをより重視しているかといった視点で分類し、分析することができると思う。

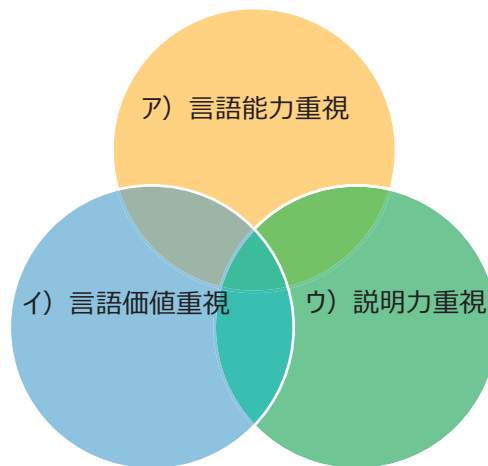


図2 国語科教師の市民育成観の3つの類型

ア) 言語能力重視の市民育成観

このタイプは、A氏がより当てはまる。「(説明力は) 子どもたちが、自分っていうものを表現したり、自分がやりたいことを自己実現していくためには、絶対的に必要なんじゃないかと思っている」と述べているように、A氏は対象に変化を与えていくためには、相手を納得させるような言語能力が必要であると考えている。しかし、A氏は、市民育成へ向けて、「言葉への感度を高める」ことも重要視しているため、イ)にも当てはまる。A氏がこのタイプに属したのは、A氏自身の問題意識や教育観が影響していると考えられる。言語能力を重視する考え方は、教材についても教科書だけではなく、日常生活や子どもたちの生活経験の中から発掘していくことも多い。

イ) 言語価値重視の市民育成観

このタイプは、B氏がより当てはまる。言語の価値と言っても、教師から押し付けるものではなく、子ども自身がその価値に気づくように関わっていくことが重要であり、言葉について深く考えるこ

とが、言語生活を豊にすることにつながり、それが市民として生きていくことに資すると捉えている。しかし、B氏は、自分という存在を表現する、思っていることを伝えることも大切にしていることが、回答から窺えるため、ア)の類型にも当てはまる。

B氏がこのタイプにより当てはまったのは、B氏自身の教育観が影響していると考えられる。「言葉に対して真摯でありたい」「なるべく子どもたちがどう解釈したとか自分はこういうふうに表示したいというのは待ちたい」といった語りからもわかる。言語価値を重視する考え方は、教材についても教科書だけではなく、日常生活や子どもたちの生活経験の中から発掘していくことが多い。

ウ) 言語特性重視の市民育成観

このタイプは、C氏がより当てはまる。言葉が持つ強さや課題といった特性を理解させるとともに、話し合いや討論に必要なスキルを身につけさせることを重視している。そういったことを身につけておくことが、市民にとって重要だと考えている。

しかし、C氏は多様な解釈が生まれる言葉そのものを大切にしていることから、ア)にも当てはまる。子どもが言葉の特性に気づくための発問や、教材の特性を生かしながら、指導内容を習得させるための展開の工夫など、指導のきめ細かさが見られる。教科書の教材内容を重視するため、子どもの生活経験や社会生活を教材とすることは少ない。

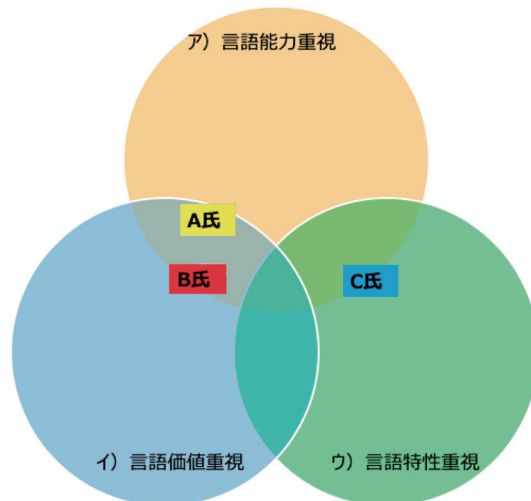


図3 各類型をもとに分布された3名の市民育成観

(2) 各類型の関わりから

市民育成観として説明力を重視するA氏の回答からは、授業づくりや授業を行う上で図4のように「子どもたちの日常や生活経験を重視」する傾向があり、言語特性を重視するC氏の回答からは、「教科書の内容を重視」する傾向があることがわかった。さらに、言語価値を重視するB氏の回答からは、どちらの傾向も見られることがわかった。

これらのことから、国語科の授業づくりや実際の授業内容には、それぞれが重視する市民育成の要素が影響する可能性がある。

今回は3名の調査対象者を帰納的に類型化したわけであるが、例えばイ)とウ)を併せ持った市民育成観を持った教師(図5の赤丸)や、各類型に純粹に当てはまる教師(図5の緑丸)などもあることが想定される。実際、藤森は、国語科教師ではないが、自身の実践を振り返ると、イ)とウ)を重視している。今後調査の対象を広げ、この類型の妥当性等を検証していく必要がある。

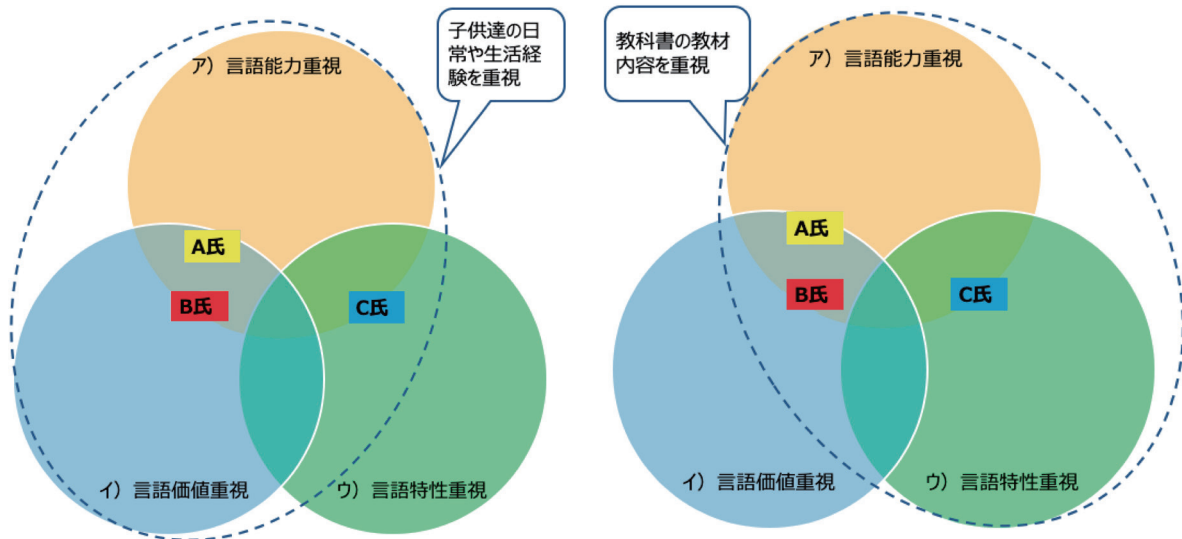


図4 市民育成観と授業づくりとの関連

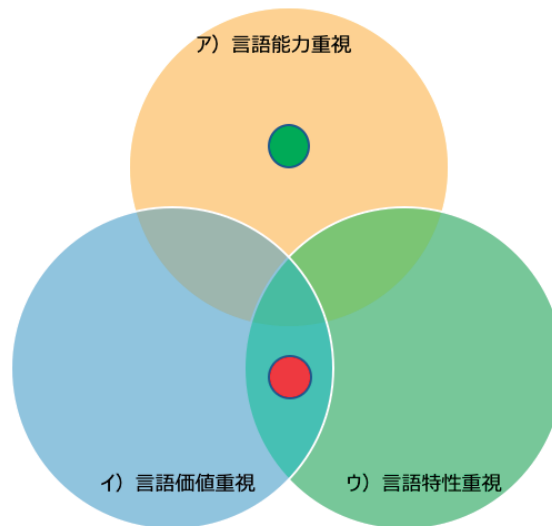


図5 様々な類型化のパターン

2. 国語科教育における市民育成についての考察

(1) 国語科教育の可能性と課題

3つの類型全てに、市民として望ましい態度形成へ良い影響をもたらす要素があると考えられる。例えば、言葉について深く考える姿勢は、社会的事象を形作る言葉に対して深く考えることにつながり、言葉の特性をしっかりと理解することは、情報化社会の中で、言語に対してより慎重に関わることができるだろう。また、話し合いのスキルや説明する力も、価値が多元化する社会においては、様々な価値観を持つ人間との関わりが避けられないため、自ずと必要となる力である。さらに、大学教員の回答からは、国語科の教科そのものがその構造や特性上、市民育成と関係を持たざるを得ないことや、そのことを教師が理解する重要性が明らかになった。

一方で、小学校国語科教師のインタビュー内容のA-2やB-3からは、それらの市民育成観が、子どもたちの日常生活や経験を重視していながらも、言葉を通して「個人が今ある社会の中でどうよりよく生きていくか」という視点で語られていることが多いことがわかる。また、国語科の学習

を通じて学び得たものが、他教科や社会生活にどう生かされていくかについては、あまり意識されていないことも明らかになった。

（2）社会科教育との比較から

社会科の学習の対象は「社会」である。そして、その社会の形成者を育成していくことが社会科の目的であり、それが市民育成であるとも言える。社会科をこのように捉えると、「個人が今ある社会の中で（言語を通して）よりよく生きる」視点で語られることが多かった国語科教育とは、以下の図6、図7のような違いがあると考えられる。

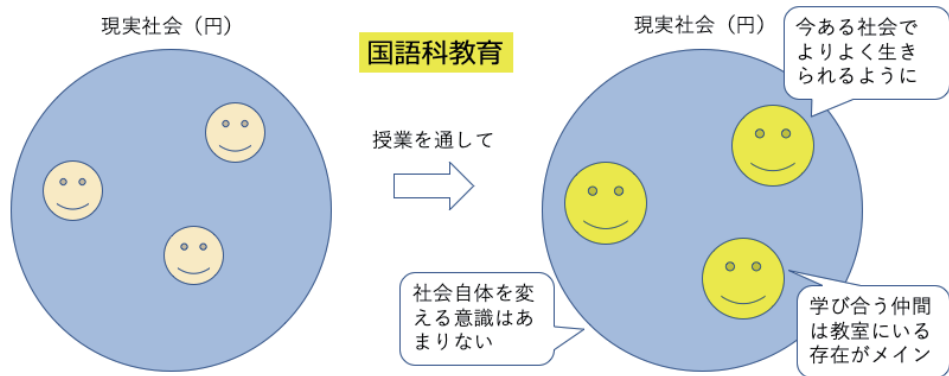


図6 国語科教育によって変化する児童の姿や考え方の例

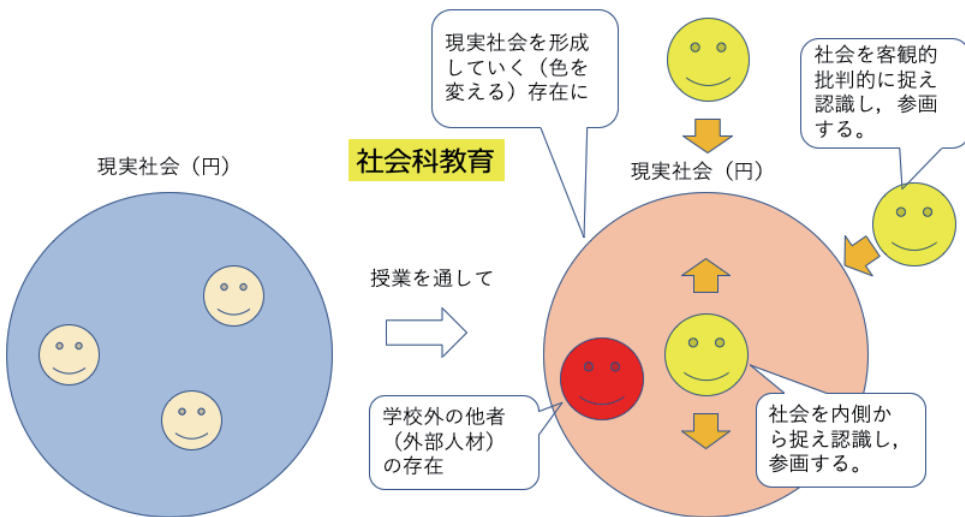


図7 社会科教育によって変化する児童の姿や考え方の例

3 研究のまとめ

（1）学校教育における市民育成

今回明らかになったように、国語科教師は市民育成につながっていくと考えられる実践を実際に行っており、市民育成に向けた国語科教育の可能性も示された。一方、やはり国語科教師は教科の本質を踏まえて国語科の目標を達成するために授業を行なっているため、市民育成とのつながりを常に意識することが難しいこともわかった。

今回の調査は、附属小学校の国語科教師を調査対象としたが、公立校の教師はどう捉えているのか。また、国語科は市民育成を中心とした教科ではなく、D氏の『やまなし』は市民性のために作られているわけではないから、これを間違えてしまうと、教材が狙いの道具になっていってしまうので、そこは国語科の中で十分注意しなければいけない」といった指摘もしっかりと受け止めなければならない。

では、今後どのように市民育成に向けた各教科や学校教育のあり方を考えていけばよいのだろうか。重要なことは、今回の研究で明らかになったような無自覚的に行われている国語科教育における市民育成をどのように意識化していくかという点であると考えられる。そのためには、個人ではなく組織的な取り組みが必要不可欠であるが、今回の調査対象者の人数や限定された属性等を踏まえると、その具体を示すことはまだできないと考える。このことについては、今後の課題としていく。

最後に、社会科教師の市民育成観について再考していく。

今回明らかになった国語科教師の市民育成観と、社会科教師の市民育成観の違いは、それぞれの教科における主たる学習対象の違いが大きく影響していると考えられる。図8、図9のように、社会科はその学習対象が常に「社会」であり、その社会は言語を通して理解され、認識されていく一方、国語科は教科書教材や子どもたちの経験、社会的事象を通した言語そのものであることが多い。このことから、社会科における市民育成を考えていく際には、社会の中にある恒久的な問題や論争問題等、社会の形成者として対峙していくべき事象を社会科の学習対象として（教師または子どもが）選択していく意識を持つことが重要であり、（限られた調査回答からの分析ではあったが）国語科教師が、「今の社会の中でよりよく生きることのできる市民の育成」を意識しているのであれば、社会自体を問い直すといった市民育成観が社会科教師に求められるべきであろう。

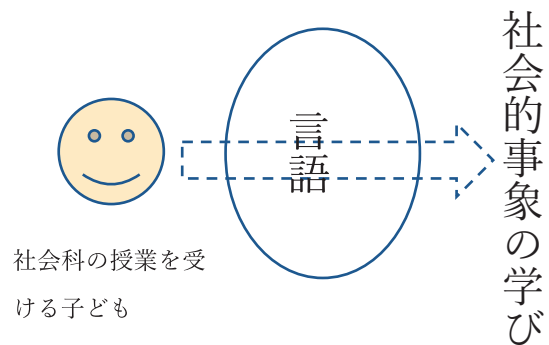


図8 社会科教師の市民育成観イメージ

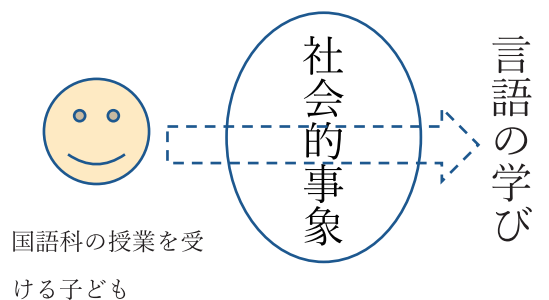


図9 国語科教師の市民育成観イメージ

両教科の共通点としては、言説や語りを鵜呑みにせず、一度立ち止まって考えること、言語によって対象がいかにどのようにでも変化する認識を重視していることが挙げられる。両者の立場での過去の実践からも見られる、社会科教育での「批判」や、国語科教育での批判的読みという活動からも、重複する市民育成観と言えるだろう。

以上のような両教科の市民育成観の相違点と共通点の中には、各教科等を通して目指す市民の育成に向けて、それぞれ良さと課題が存在すると考える。相違点からは、例えば、各教科等で育成が

期待される市民性を分業的に捉え、各教科で目指す市民像に向かっていくことができる一方、それが制度的に、各教師の意識的に可能なのかという課題が残るだろう。共通点からは、例えば、ある市民性を重点的に育成することができる一方、社会科の固有性が失われたり、本質から外れた授業が展開されたりする危険性が課題として残るだろう。社会科教育を中心に各教科等を通じて市民育成を行なっていくことに疑いはないが、その際には、各教科の市民育成観の相違点や共通点から捉えることができる良さや課題を踏まえて、どのようにアプローチしていくかが論点になる。

これらの比較は藤森の主観的な分析であるため、今後は具体的な実践や国語科の教育課程上の位置付けといった客観的な事実から分析をしていく必要もあると考える。

V 今後の展望

以下に示す3点を中心に研究を継続していきたい。

1 調査対象者の拡充

今回の調査対象者は国立大学附属小学校の国語科教師と国立大学教員であった。非常に限られた属性での調査であったため、妥当性や信頼性に欠ける分析となっている。今後は、公立校教師や他教科といった様々な属性にも調査対象を広げていく。

2 実現可能なカリキュラム開発

無自覚的に行われている国語科教育における市民育成をどのように意識化していくかという点が課題として明らかになったものの、実際にそれを実現することは容易ではない。誰が、どのように、どんな手順で行っていけばよいのか、それを一般的な公立校において実現するためには、どんなことが必要なのかなど、より具体的なアプローチを実践者の立場から探っていく。

3 市民育成のための社会科教育

今回、国語科教師の市民育成観や国語科教育との比較の中で明らかになった、今後求められるべき社会科教師の市民育成観は、自明のことかもしれない。しかし、比較することによって、自明とされているものを捉え直したり、他教科における市民育成を意識した社会科教育や市民育成観のあり方を考えたりする必要性を示すことができた。

一方、今回の調査は限られた属性であったため、調査対象者の拡充等に伴い、今回とは違った社会科教育を捉える視点が出てくることも考えられる。他教科とのつながりを意識した実践を積み重ねるとともに、社会科教育自体への批判的な検討も同時に行っていく。

謝 辞

本研究にあたり、ご協力をいただいた5名の調査対象者の皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

- ・後藤賢次郎「私たちはどのように市民育成者になっていくのか—分野・学校種・環境の異なる人々のフォーマル/インフォーマルな学びに注目して—」『山梨大学教育学部紀要』第30号, 2019, 261-280。
- ・佐長健司「市民育成教育の実存論的考察—市民的語りにおける科学的知識をどう考えるか—」『佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要』第4号, 2020, 178-193。

- ・長沼豊「市民教育としての算数・数学教育の機能：新教育課程における可能性を探って」『学習院大学文学部研究年報』第56号，2010，265-280。
- ・藤森啓太，後藤賢次郎，饗場宏「批判を位置付けた市民性育成のための授業構想」『教育実践学研究 山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第27号，2022，465-480。
- ・山田瑞貴，内海志典「理科における科学技術に関連した社会的諸問題（SSI）に関する研究－シティズンシップ教育との関係に着目して－」『理科教育学研究』Vol. 62, No. 1，2021，355-365。
- ・横田和子「小学校国語教育における市民性形成をめぐる場づくりの課題」『目白大学 人文学研究』第14号，2018，43-54。
- ・日本教科教育学会『教科とその本質－各教科は何を目指し，どのように構成するか－』教育出版，2020。